

## 平成29年秋期企画展 国立科学博物館・巡回ミュージアム in サヒメル「かはくから恐竜がやってきた！」開催の記録

遠 藤 大 介\*・濱 村 伸 治\*\*・舟 橋 位 於\*\*・真 鍋 真\*\*\*

### Report of the Collaborated Exhibition “Dinosaurs came to Sahimel”, the Autumn Temporary Exhibition 2017

Daisuke Endo, Shinji Hamamura, Io Funahashi and Makoto Manabe

#### Abstract

The autumn temporary exhibition 2017, “Dinosaurs came to Sahimel” was held at the Shimane Nature Museum of Mt. Sambe (Sahimel) from 7 October through 26 November 2017. The exhibition was organized by Sahimel and the National Museum of Nature and Science. This report reviews the exhibition from its planning to visitor questionnaire.

**Key words:** Special exhibition, Dinosaur, National Museum of Nature and Science

#### 1. はじめに

島根県立三瓶自然館（以下「三瓶自然館」）では、動物分野、植物分野および地学分野に関するテーマに基づき、企画展をおもに年3回（春、夏、冬）開催している。三瓶自然館の企画展について、その経緯や展示内容、来場者アンケートなどについてまとめられたものは、福岡ほか（2009）による2008年夏期企画展「大化石展」に関する報告のみである。国府田ほか（2005, 2012）では、茨城県自然博物館での恐竜をテーマにした企画展について、展示資料の調査から輸送・組立、広報戦略、展示シナリオの詳細を報告しており、レイアウト図面一つとっても、展示空間のデザインを検討する際の参考資料となる。企画展の開催には、毎回膨大な時間や労力の投資がおこなわれており、実施運営方法や展示手法等について記録を残すことは、当館のみなら

ず他館にとっても有用な資料になると思われる。

本報告は、2017年10月7日から同年11月26日まで三瓶自然館の秋期企画展として開催された「かはくから恐竜がやってきた！」の開催経緯、展示内容、企画展関連イベント、アンケート結果などを記録として保存し、今後の企画展を構築する上での参考資料とするためここに報告するものである。本企画展は、独立行政法人国立科学博物館（以下「科博」）が全国各地の博物館等と連携して展開している「巡回ミュージアム」の一つとして開催されたものである。巡回ミュージアムの内容としては、平成28年夏に科博を会場に開催された『恐竜博2016』の展示の一部を巡回展用に再構成したもので、いわゆる通史的な展示ではなく、いくつかのキーワード「鳥類の起源」、「子育て」、「絶滅」、「分類と進化」などを切り口にした展示を開催するものである。巡回とはしているものの、パッケージ化されたものではなく、開催館の規模やテーマ、要望に応

\* 島根県立三瓶自然館, 〒 694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan

\*\* 国立科学博物館 博物館等連携推進センター, 〒 110-8718 東京都台東区上野公園 7-20

Center for Promotion of External Affairs and Education, National Museum of Nature and Science, 7-20, Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8718, Japan

\*\*\* 国立科学博物館 標本資料センター, 〒 305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

Center for Collections, National Museum of Nature and Science, 4-1-1, Amakubo, Tsukuba, Ibaraki, 305-0005, Japan

じてアレンジすることがコンセプトにある。三瓶自然館の年館来場者の約6割は未就学児～小学生の子を持つ親子連れであり（龍, 2018），企画展の内容検討にあたってはこれらの来客層を対象にした。

また、本事業は平成29年度文部科学省委託事業である「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」における、「学芸員等の資質向上とネットワークの構築を通じた博物館の機能強化モデルの提言」において実施された。そのため、企画展に関連してさまざまな講演会や研修、普及・啓発イベントなどがおこなわれた。こうした活動も今後の企画展実施の参考となると考えられることから、併せてここに報告する。

## 2. 連携事業実施までの経緯

企画の発端は、2016年9月に科博から三瓶自然館に対して巡回ミュージアム開催の提案があったことである。三瓶自然館でおこなわれる企画展は原則、島根県との協定（三瓶自然館の指定管理者である公益財団法人しまね自然と環境財団と島根県との間で結ばれた「島根県立三瓶自然館及びその附属施設の管理運営に関する仕様書・協定書」）に基づいて年に3回（春・夏・冬）実施している。そのため、この協定のなかで計画されている内容と異なる企画を実施したり、計画にない企画を新たに実施したりする際には、館の設置者である島根県との協議を行い、了解を得る必要がある。そこで、三瓶自然館の学芸課職員が中心になり、企画展実施の時期や運営体制、予算の確保・調整に向けた検討をおこなうことになった。協議・検討の末、今回の巡回ミュージアムを三瓶自然館の秋期企画展として実施することで調整がなされた。

三瓶自然館内部や島根県との協議と並行して、2017年1月には科博側の担当者らが島根を訪問し巡回ミュージアムや委託事業の内容について説明を行った。協議では、巡回展の内容説明に加えて、開催主体や期間・入館料の設定、双方での経費負担割合などが話し合われた。三瓶自然館で開催されるイベントは年初にイベントカレンダーとして一覧にされ、学校や近隣の施設に配布・周知をおこなっている。このため企画展のタイトルと概要、おもな関連イベントについては、優先して調整を進めた。

企画の方針や概要が決まった2017年2月以降は、島根県との協議をおこない、具体的な展示物の選定、展示レイアウトのデザインを進めた。展示資料やレイアウトの検討にあたり苦労した部分としては、連携館が東京と島根で離れていたことから、大部分の調整を

メールや電話でのやりとりでおこなわなければならなかったことである。パネルや資料などを直接見ながら話合いを進めたい場合には、Skype（マイクロソフト社の提供するインターネット電話サービス）を使用した。今回の企画展では三瓶自然館での展示室の間取りに合わせて壁紙を作成したり、サイエンスイラストレーターに依頼して復元画を作成して展示した。また、解説パネルの原稿執筆や作図についても、科博と三瓶自然館が共同作業で製作を進めた。今後、遠方の博物館と連携して事業をおこなうことが増えていくと予想される。遠隔地のメンバーをつなぐコミュニケーションツールを整備しておくことは、連携館どうしを直接行き来する回数を減らしたり、情報共有のための資料作成時間を節約したりできるなど、有力な手段だといえる。

本事業は2017年4月に科博から文部科学省への予算要求にかかる事業計画書が提出され、6月に正式に採択された。事業の実施体制は図1に示したとおりである。また、6月には同じく連携事業をおこなった長野市立博物館での視察と研修をおこない、他館での普及・啓発事例の共有をおこなった。企画展開幕の約2ヶ月前である8月に、三瓶自然館（指定管理者：公益財団しまね自然と環境財団）と国立科学博物館の両者により巡回ミュージアムの実施に関する協定書が締結された。

## 3. 企画展の内容

### （1）企画展の概要

#### 1) 企画展のタイトル

平成29年秋期企画展「かはくから恐竜がやってきた！」 国立科学博物館・巡回ミュージアム in サヒメル

#### 2) 趣旨

国立科学博物館が所蔵する、アジア最大級の肉食恐竜タルボサウスや日本人によって初めて研究・記載された恐竜ニッポノサウルスの全身骨格のほか、始祖鳥や恐竜の羽毛化石などのレプリカや模型を展示した。展示室では、「恐竜の子育て」と「恐竜から鳥への進化」の2つのメインテーマでストーリーを構築し、レプリカや実物標本だけでなくハンズオン展示を多く配置することで、低年齢層にも内容が伝わりやすい展示を目指した。また、化石や恐竜の愛好者にも満足してもらえるよう、直近数年での最新研究で明らかになった成果を交えて紹介した。

#### 3) 主催・共催

島根県立三瓶自然館、公益財団法人しまね自然と環

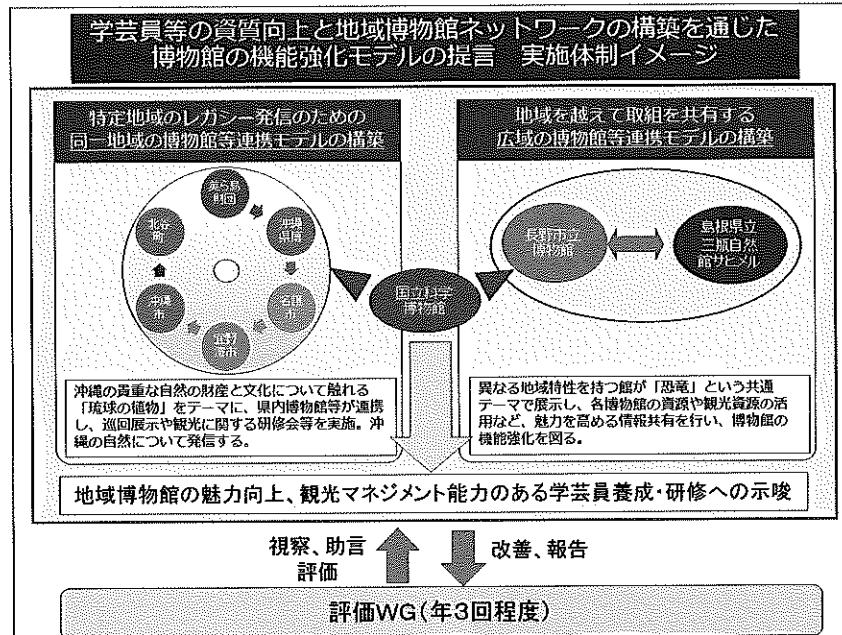


図1 事業の実施体制

境財團、独立行政法人国立科学博物館、中国新聞社（共催）

#### 4) 後援

島根県教育委員会、大田市教育委員会、NHK 松江放送局、TSK 山陰中央テレビ、日本海テレビジョン、BSS 山陰放送、石見銀山テレビ放送株式会社、エフエム山陰、エフエムいづも、山陰中央新報社、朝日新聞松江総局、読売新聞松江支局、毎日新聞松江支局、産経新聞松江支局、島根日日新聞、新日本海新聞社

#### 5) 協力

菊谷詩子氏、岡山理科大学生物地球学部生物地球学科 恐竜・古生物学コース、島根県産業技術センター

#### 6) 会期

2017年10月7日（土）～11月26日（日）（休館日を除く開館日数44日）

#### 7) 入館料

大人：700円、小中高生：200円、未就学児：無料

#### 8) 展示室

島根県立三瓶自然館 別館2階 企画展示室（145 m<sup>2</sup>）、本館1階ホール、2階回廊

#### 9) 恐竜組立

有限会社 ゴビ サポート ジャパン

#### 10) 会期中の入館者数

19,875人（1日平均452人）

### (2) 広報活動

おもな広報活動としては、県内市町村や近隣施設等へのポスター掲示やチラシ（図2）配布、新聞・各種

広報誌への情報掲載やコラム等の寄稿、地元ケーブルテレビや県内ラジオ局での特集番組やCM放送のほか、SNSを活用した広報などを展開した。広報先と発送部数などの概要は表1に示したとおりである。

前述したとおり、三瓶自然館では通常秋期には企画展を開催していない。そのため、今回の企画展では経費や作業量を節減するための工夫として、直前に開催した夏期企画展と連動した広報戦略を展開した。具体的には、小学生向けの無料招待券を夏・秋共通で利用できるようにしたことと、大型ドーム映像特別番組として「アッテンボロー博士と秘密の博物館～よみがえる恐竜たち～」の上映を行うことで、効果的な周知を狙った。この番組は2017年3月18日から6月11日まで科博で開催された大英自然史博物館展において、展示室内の至る所で映像展示として紹介され話題となつた作品である。

また三瓶自然館が発信したものではないが、テレビ朝日の番組「テンション上がる会？～地球のことで熱くなれ！～」（2017年11月26日 14:55～15:40放送）において、企画展での恐竜骨格の組み立ての様子が紹介された。放送日が企画展最終日であったため、放送を見ての来客は見込めなかったが、三瓶自然館にとっては館の存在や活動を全国に周知でき、また一般にはあまり知られていない「恐竜の組み立て」という仕事の様子や重要さを伝える好機となった。

なお、上記の広報活動に加え、新聞・テレビ各社による取材への対応も随時おこなった。



図2 三瓶自然館秋期企画展のチラシ(左:表、右:裏)

表1 企画展開催にかかる広報活動

媒体区分	広報媒体	広報先および内容、掲載・放送日	発行部数・放送回数
知事定例記者会見		島根県内への県政情報の告知(9月27日)	-
県政ラジオ番組		島根県内への県政情報の告知(9月28日)	-
ポスター	ポスター	島根県内の博物館、図書館、公民館、観光施設等	400部
チラシ	チラシ	上記に加え、島根県・広島県の小中学校、大型商業施設等	20,000部
招待券	無料招待券	島根県・広島県内の全小学校児童 ※夏期企画展との共通券として	200,000部
新聞	中国新聞社	共催による特別広告、紹介記事掲載	21回
	島根日日新聞	内容紹介記事掲載(10月21日、25日、11月21日)	3回
雑誌	観光情報誌「あ・るっく」	広島・愛媛県内の一般家庭、道の駅、高速道路 SA、コンビニエンスストアなど	270,000部
	まち歩き バリアフリー情報誌「てくてく日和・山陰」	山陰地域の障がい者、高齢者	8,000部
テレビ	TSK 山陰中央テレビ	「なるほど!吉田くんのしまねゼミ」(10月30日放送)	-
	テレビ朝日	「テンション上がる会?~地球のことで熱くなれ!~」(11月26日放送)	-
	山陰ケーブルビジョン	松江市、安来市内へのスポットCM(10月7日~11月25日)	292回
	出雲ケーブルビジョン	出雲市内へのスポットCM およびニュース(10月9日~11月3日)	129回 (うちニュース14回)
	石見銀山テレビ	「さんべ発 サヒメルnavi」内にて(9月、10月、11月)	6回
WEB	三瓶自然館 HP	公式HPトップのバナーおよびイベント情報欄での内容紹介	-
	三瓶自然館 Twitter	公式アカウントでのツイート(随時)	-
その他刊行物など	イベントカレンダー(年鑑)	島根県内の小・中学校、博物館、図書館、公民館、観光施設等	45,000部
	定期イベント案内(隔月)	島根県内の小・中学校ほか各公共施設、年鑑バスポート会員、ボランティア等	1,000部
	ニュースレター(隔月)	年鑑バスポート会員、県内の小中学校、図書館、市町村等	3,000部

### (3) 展示内容

今回の企画展では、シンボル展示である2体の恐竜骨格（ニッポノサウルス；本館ホール、タルボサウルス；企画展示室）をオープン展示として構築し、狭い展示室のなかでなるべく多くの全身骨格標本を展示するため、立体的な空間演出に努めた。展示平面図を図3に示す。

展示では国立科学博物館（以下、科博）が所蔵するアジア最大級の肉食恐竜“タルボサウス”的全身骨格（図4）のほか、日本で最初に見つかった恐竜“ニッポノサウルス”を目玉展示（図5）に据えて、このほか始祖鳥や恐竜の羽毛化石などについてレプリカや拡大模型を展示した。展示構成はいわゆる通史的な見せ方ではなく、「恐竜の子育て」と「恐竜から鳥への進化」の2つのテーマを設定して、それぞれ最新の研究成果を交えて紹介した。展示標本は2016年夏に科博を会場に開催された「恐竜博2016」の展示の一部を巡回展用に再構成したものとベースに、三瓶自然館の所蔵

標本や新たに手配した資料を加えて構成した。とくに恐竜や古生物の展示では化石や骨格の展示が中心になることが多い、生きていた当時の様子をイメージすることが難しいという側面がある。そのため企画展では、解説パネルに生体復元画を添えて展示した。「マイアサウラの親子」など数点の復元画については、当館の展示のために描き下ろしたものである。展示標本の一覧を表2にまとめた。

#### ＜本館1階ホール～2階回廊＞

企画展の導入と位置づけ、ニッポノサウルス全身骨格標本を展示して、恐竜とはどんな生物かを解説するコーナーとした。また、企画展示室までの導線を意図して、経路途中の各所にアイキャッチとなるタッチ化石を配置した。回廊のギャラリー部分には、モンゴルでの恐竜化石発掘現場の写真やパネルを掲示し、発見された化石がどのような過程を経て研究や展示に活用されているのかを紹介した（図6）。

表2 展示標本リスト

No.	標本名	大きさ(mm)	所蔵館
1	タルボサウルス復元全身骨格標本（レプリカ）	6,900×2,200 (要組立)	国立科学博物館
2	ニッポノサウルス復元全身骨格標本（レプリカ）	4,000×1,800 (要組立)	国立科学博物館
3	デイノニクスの全身骨格（レプリカ）	1,720×3,700×2,070 (要組立)	国立科学博物館
4	クリンダドロメウス	1,300×900×1,000	国立科学博物館
5	尾羽竜 復元全身骨格標本（レプリカ）	820×460×570	国立科学博物館
6	尾羽竜 産状（レプリカ）	500×800×15	国立科学博物館
7	始祖鳥 復元全身骨格標本（レプリカ）	400×400×400	国立科学博物館
8	始祖鳥 産状	430×600×30	国立科学博物館
9	ニワトリ 全身骨格標本	300×400×700	国立科学博物館
10	触れる羽毛	約300	国立科学博物館
11	バラサウロロフス幼体頭骨	260×230×250	国立科学博物館
12	バラサウロロフス成体頭骨	—	国立科学博物館
13	マイアサウラ幼体・卵	500×150×150	国立科学博物館
14	オロドロメウスの巣	約600×600×600	国立科学博物館
15	プロトケラトプス全身骨格（レプリカ）	900×2,050×720	国立科学博物館
16	ティラノサウルスの足パズル	1,600×1,050×850	国立科学博物館
17	竜脚類の大腿骨（実物タッチ化石）	900×430×400	国立科学博物館
18	竜脚類の全身骨格模型 (プラキオサウルスの骨格フィギュア)	900×450×250	国立科学博物館
19	ステゴサウルス上腕骨(タッチ化石)	600×300	国立科学博物館
20	ステゴサウルスの全身骨格模型 (骨格フィギュア+復元フィギュア)	400×230 220×115	国立科学博物館
21	珪化木(実物タッチ化石)	約Φ300×300	国立科学博物館
22	タルボサウルス交連頭骨標本（レプリカ）	800×400	三瓶自然館
23	タルボサウルス下頸骨標本（レプリカ）	700×250	三瓶自然館
24	恐竜糞化石	250×250	三瓶自然館
25	ヒゲワシ剥製	1,800×1,300	三瓶自然館
26	現生鳥類の卵(キセキレイ、カワガラス、エミュー、ダチョウ)	—	三瓶自然館
27	現生鳥類の巣(キセキレイ)	300×300	三瓶自然館
28	小型鳥類の剥製(キセキレイ)	200×200	三瓶自然館
29	現生鳥類の羽毛	—	三瓶自然館

平成 29 年度秋期企画展  
【かはくから恐竜がやってきた！】展示レイアウト

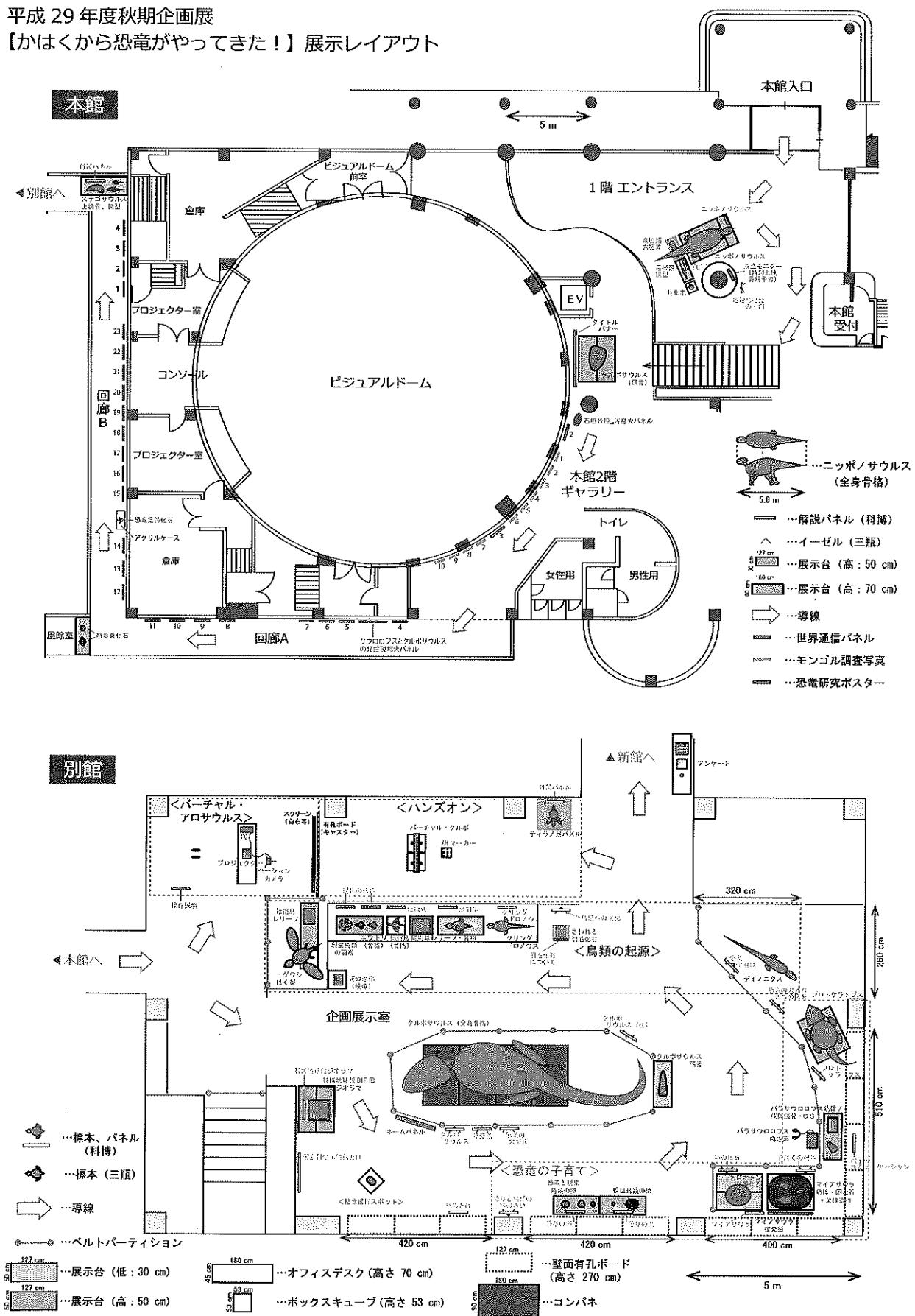


図3 企画展の展示平面図

### ＜企画展示室＞

展示室前や廊下には、最古の鳥類とされる始祖鳥と現代の鳥類であるヒゲワシの展示やバーチャル体験コーナー(図7)を設けることで、展示室への期待感をふくらませる工夫を行なった。また、展示室入口付近には、巡回元の国立科学博物館の紹介と目玉展示であるタルボサウルスの記念撮影コーナーを設けた。しゃ

がんだ姿勢のタルボサウルスの復元骨格は世界で唯一の標本であり、復元画は今回の展示に合わせて描き下ろしたものである。展示前半部では恐竜の巣の化石や卵の化石のほか、孵化直後の幼体化石と子育て風景の復元画を展示し、恐竜たちの子育てについて紹介した(図8)。また、後半部への伏線として、三瓶自然館所蔵の現世鳥類の卵や巣、剥製などを合わせて展示した。



図4 タルボサウルスの展示(企画展示室)



図7 体験コーナーの様子



図5 ニッポンサウルスの展示(本館エントランスホール)



図8 恐竜の子育て展示の様子



図6 回廊展示の様子



図9 恐竜から鳥への進化の展示

最近発見され注目を浴びた、羽毛を持つ鳥盤類恐竜のクリンダドロメウスを中四国地方で初めて展示したほか、獸脚類恐竜から尾羽竜、始祖鳥、現世鳥類標本へと時代に沿って展示することで、恐竜から鳥類への進化を学べる構成とした（図9）。

また今回の展示では、体験展示の充実も重視した。具体的には島根県産業技術センターの協力を得て制作したVRアプリ「バーチャル・タルボサウルス」の運用や、科博所蔵の体験展示「バーチャル・アロサウルス」、恐竜の骨格パズルの展示などである。このうちバーチャル・アロサウルスは、体験者の動きを感じて捉える（モーションセンサー機能搭載）カメラを使った体験展示で、専用カメラの前に立って体を動かすと、動作に合わせてスクリーン上のアロサウルスが動き出すというのものである。研究成果の蓄積によるアロサウルスの生体復元の変遷を、歩行姿勢や体の動きから学ぶことができる内容となっており、開館中は常時稼働させた。

#### 4. 企画展の関連イベント・関連事業

企画展に関連する各種イベントの開催については、次の5事業を実施した。

##### (1) 恐竜3Dぬりえ

・期日：10月8日（日）、29日（日）、11月19日（日）  
10:00～11:30, 13:30～16:00

・内容：恐竜の絵柄が描かれた専用のぬりえ用紙に色塗りをさせ、スキャナーで取り込むと描かれた恐竜が3Dになって歩き出すという内容。図鑑などに書かれた恐竜の皮膚の色は生息環境や生態に基づき想像で描かれている。参加者は展示をヒントに想像した色で恐竜を描いた。自分が描いた恐竜と一緒に撮影をするコーナーも設けて、撮影した写真は記念に持ち帰ってもらった。

・対象：入館者（当日申込制）  
・参加者数：166名  
・場所：新館4階こども博物館

##### (2) 化石のレプリカ作り

・期日：10月14日（土）、15日（日）  
・内容：身近な化石であるアンモナイトを題材に、石こうを用いたレプリカの作成方法を学んだ。  
・対象：入館者（当日申込制）  
・参加者数：64名  
・場所：別館1階レクチャールーム

##### (3) きょうりゅうはかせの『最新！恐竜学』

・期日：10月21日（土）13:00～14:30  
・講師：真鍋 真（国立科学博物館 コレクションディレクター）  
・内容：日本の恐竜研究の第一人者である国立科学博物館の真鍋による記念講演。国内外の最新の研究成果を紹介しつつ、クイズなどを交えながら恐竜の生態を楽しく学んだ。化石・恐竜ファンのみならず、初心者でも理解できる講演内容は好評で、参加者の満足度は高かった。  
・対象：入館者（事前予約制）  
・参加者数：125名  
・場所：本館ビジュアルドーム

##### (4) えほん meets 博物館 × せいめいのれきし（改訂版）

・期日：10月22日（日）10:00～11:30  
・講師：真鍋 真（国立科学博物館 コレクションディレクター）  
・内容：三瓶自然館の常設展示室および企画展示室を会場とし、絵本を片手に物語に登場する標本について観察するポイント等の解説をおこなった（図10）。イベントでは参加者からの自由な発言や意見を促しながら絵本のテーマを用いて館内の展示を見学することで、未就学世代のための博物館・科学館活用の手法を提案するため、他館学芸員や図書館司書を招き意見交換をおこなった。  
・対象：親子  
・参加者数：18名  
・場所：三瓶自然館新館展示室および別館企画展示室

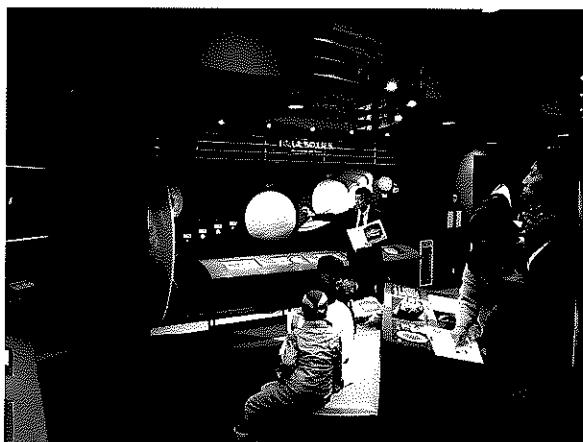


図10 イベント「えほん meets 博物館 × せいめいのれきし（改訂版）」の様子

##### (5) 世界から見た高見の地質と貝化石

・期日：11月18日（土）  
・講師：芳賀 拓真 氏（国立科学博物館 地学研究部）  
遠藤 大介（三瓶自然館）

- ・内容：島根県邑南町や広島県庄原市などで活動するアマチュア化石研究者を対象に、第一線で活躍する研究者を招いて、貝化石研究の最前線を聞く講演と化石採集・標本処理の実習を組み合わせた内容（図11）。複数地域の研究会を対象にしたことで、地域間の情報交換などの交流も生まれた。
- ・対象：地域で活動するアマチュア化石研究家など
- ・参加者数：14名
- ・場所：邑南町高海自治会館



図11 研修「世界から見た高見の地質と貝化石」の様子(邑南町高見)

## 5. アンケート調査

三瓶自然館では、企画展を評価する方法の一つとして、アンケート調査を実施している。本企画展に際するアンケート調査は、開催期間（10月7日～11月26日）毎日の延べ44日間実施した。調査は展示室出口付近にテーブル、椅子および筆記用具を用意し（図3）、来館者が自由に記入する方式で行った。アンケートの項目は、住まい、年齢、何で知ったかといった属性に加えて、展示を見て恐竜や古生物に興味がわいたか、印象に残った展示や内容に対する満足度、感想・意見等の自由記述で構成されている。アンケートの回収数のうち、無記入や判読不能などの無効回答を除いた有効回答数は277件である。有効回答数（277件）を期間中の総入館者数（19,875人）で除した回収率は約1.39%であった。結果はグラフ（図12）にまとめたとおりである。

### （1）アンケート回答者について

回答者の住まいについては、県内が59%で県外が41%，また県外の内訳を見ると広島県からが86%に上った。これらの結果を過去の当館企画展のデータ（福

岡ほか、2009）や年間を通じた調査（龍、2018）と比較すると、全体に占める県内の割合が高く、県外では顕著な広島県一極集中という傾向が読み取れる。これには企画展の開催時期が秋で大型連休が無く、日帰り圏内からの来館が多いことや、夏のような県外からの帰省客も少なかったことが背景にあると考えられる。今後、同様の時期に企画展を行う際、広報先や手段を検討する参考になると思われる。

年齢について、最も多い割合は10代以下の58%，次いで多いのが40～50代の20%であった。この結果は当館の年齢調査の結果（龍、2018）と近く、来館者の64%が家族で来館することと調和的である。

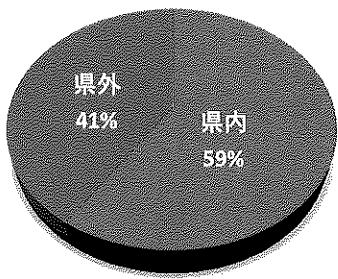
来館動機となった情報源としては、ポスター・チラシの割合が37%と最も高かった。これに続いてインターネット（12%）、新聞（8%）、テレビ・ラジオ（6%）の順であった。2008年時のデータ（福岡ほか、2009）では、同様にチラシが高い割合であったが、上記3項目について新聞（8%）、テレビ・ラジオ（4%）、インターネット（4%）の順であった。約9年間でインターネットの割合が3倍に増加しており、情報社会への変化を反映していると考えられる。

### （2）展示内容・展示物について

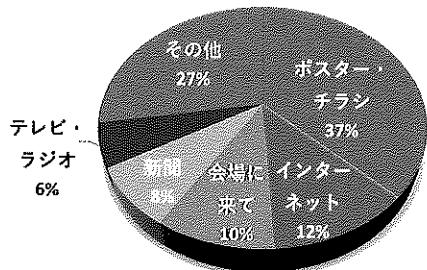
企画展を見て恐竜や古生物に興味を持ったかという質問には、「興味を持った」が72%、「やや興味を持った」が23%で、合わせて95%が興味を持ったと回答した。これほど高い評価となった要因として、今回の企画展では、低年齢の子どもでも展示を楽しめるよう体験展示を工夫し、また生体復元画を充実させたことなどが考えられる。実際に、自由記述のなかで「バーチャル・アロサウルス」や「恐竜の鳴き声」、「タルボサウルスの絵（復元画）」といった意見が多く挙げられていた点からも、期待した効果が得られたことがうかがえる。

展示に対する満足度としては、「満足」が72%で、「やや満足」が22%であった。合わせた回答は90%を超え、高い評価を得た。自由記述のなかには「いろんな恐竜の化石があったから」や、「子どもにもわかりやすい展示の工夫があったから」、「恐竜の子孫が鳥類という事実が骨格の特徴からわかる展示になっていたから」など、企画のテーマや意図にかなった意見が多く得られた。一方で、満足度の低かった回答の中には「想像していたより展示物が少なかった」や「さわれないものも多々あった」、「恐竜の骨格が怖くて子どもが展示室に入ろうとしなかった」といった意見が見られた。これらの意見について、展示の規模は予算枠や相手先との調整のために期待に添えないこともあるが、このように感じさせない工夫を積み上げていくこ

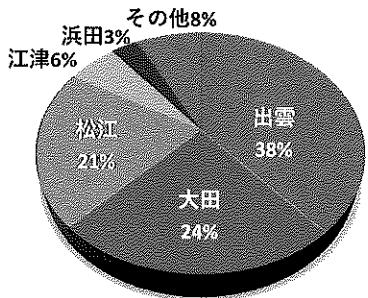
### 1-1. 住まい



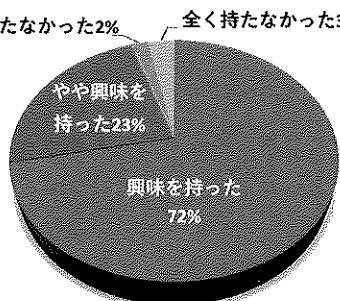
### 3. 何で知ったか



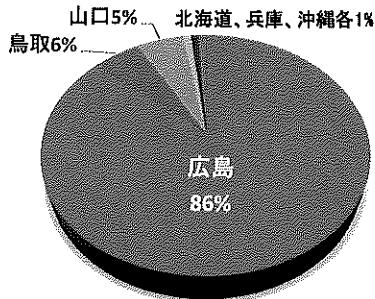
### 1-2. 県内内訳



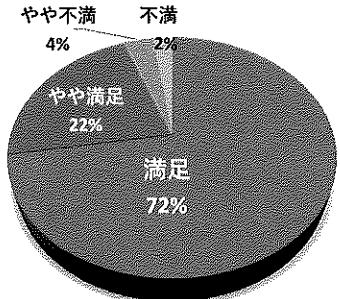
### 4. 恐竜や古生物に興味を持ったか



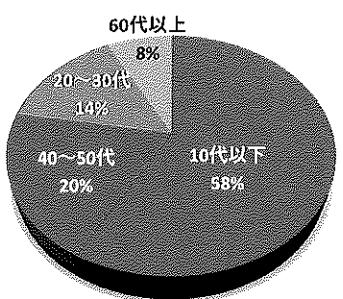
### 1-3. 県外内訳



### 5. 満足度



### 2. 年齢



### 6. 特に印象に残った展示

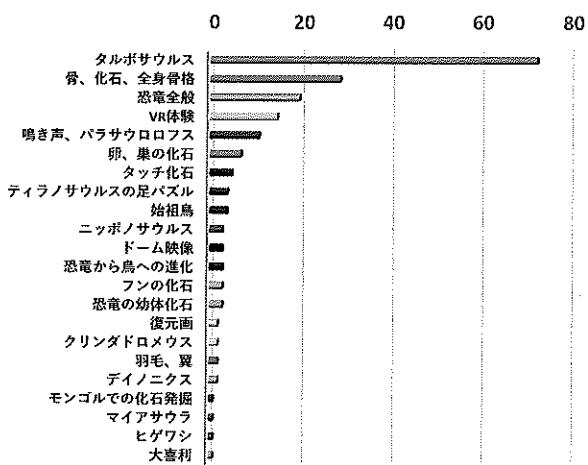


図12 企画展アンケートの結果

とが大切だろう。また、さわれないものが多いことについては、博物館の標本とは本来その多くが唯一無二の貴重なものであり、標本保護の観点からは、さわることはおろかケースに入れて展示することすら好ましいことではない。博物館側がこうした事実をきちんと伝えていかなければ、来館者からの理解を得ることは難しいと考える。全ての人に展示を楽しんでもらうためには、骨格が怖くて展示室に入れないという状況はあってはならないことである。こうした意見は少数かもしれないが、よりよい展示をおこなうために耳を傾けるべき貴重な意見であると考える。

印象に残った展示については、「タルボサウルス」を挙げた方が73件と最も多く、次いで「骨・化石・全身骨格」が29件、「恐竜全般」が20件、「VR体験」が15件、「鳴き声・バラサウロロフス」が11件となった。目玉展示としたタルボサウルスが最多となったのは予想どおりであったが、VRや鳴き声といった体験展示も奮闘している点は意外である。このことは、必ずしも迫力のある大型骨格だけが来館者の印象に残るのではなく、体験展示の与える印象についても大きな割合を占めることがわかった。通常、体験展示は企画展全体の構成の中ではコア展示となることは少ないが、企画展の成否を左右するほど大きな要素となり得る可能性を持つと考えることもできるだろう。

## 謝　　辞

今回の連携事業・巡回ミュージアムは岩手県立博物館の望月貴史博士より三瓶自然館へ打診をいただいたことがきっかけで企画がスタートした。島根県産業技術センターの篠村祐司氏には、バーチャル・タルボサ

ウルス体験展示にかかる恐竜ARシステムの構築とソフト開発をおこなっていただいた。岡山理科大学の石垣忍教授には、モンゴルでの恐竜発掘調査に関する資料をお借りした。高海自治会化石研究会の井口聰会長および高原公民館の佐藤匡裕主事、庄原化石集談会の大澤仁館長には講座開催に際して会場手配などで便宜を図っていただいた。国立三瓶青少年交流の家の西村修平氏および島根県立しまね海洋館の山口慶子氏には、イベント「絵本 meets 博物館」において有益な助言をいただいた。以上のみなさまにこの場を借りて深くお礼申し上げます。なお本事業は平成29年度文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」(経費総額14,707,000円；申請代表者：林良博)の一環として実施した。

## 引　用　文　獻

- 福岡 孝・矢田猛士・河野重範・井上雅仁・帶刀公平・太田哲朗・龍 善暢・星野由美子・中村唯史・大國陽子・石田幸代・安原豊子(2009) 2008年夏期企画展「大化石展」の舞台裏. 島根県立三瓶自然館研究報告, 7: 131-147.
- 国府田良樹・赤羽岳彦・小池 渉・増子勝男・西山由美子・細谷正夫・永瀬卓也・石川 智・佐々木 孝(2012) 第53回企画展 科博コラボ・ミュージアム in 茨城「恐竜発掘－過去からよみがえる巨大動物－」開催の記録. 茨城県自然博物館研究報告, 15: 115-127.
- 国府田良樹・小池 渉・村田太郎・宮崎淳司(2005) 開館10周年記念「恐竜たちの足音が聞こえる－中国 そして日本－」展の開催の記録. 茨城県自然博物館研究報告, 8: 135-150.
- 龍 善暢(2018) 島根県立三瓶自然館の来館者層②. 島根県立三瓶自然館研究報告, 16: 37-40.